

働き盛りは健康意識を

県医師会 青森で初の医学会

県医師会（齊藤勝会長）は4日、青森市の青森国際ホテルで、県民の健康増進

を考える第1回県医学会を開いた。医療保健関係者が「短命県返上に向けて、働き盛りの世代や若い人に一層、健康意識を持ってもらう必要がある」と訴えた。基調講演で弘前大学医学部の中路重之教授が、本県は40～60代の死亡率が特に高く、若死が多いことを指摘。その背景として、生活習慣の悪さや健診受診率の低さなどを挙げ、職場や学校での健康教養の浸透

や、健康リーター養成の大切さを強調した。

シンポジウムでは、南部町健康推進課の藤嶋聡子総括主任保健師が、健診受診率アップ作戦や小児期からの生活習慣病予防など同町の事業を紹介。働き盛りの人にどう健診を受けてもらうか、健康指導後にどのような継続指導ができるかなど課題を挙げた。

男性の平均寿命が全国ワースト4位（2010年）の青森市の山口朋子・健康づくり推進課長も、若年期からの健康学習の重要性を説明した。

2015年7月に健康づくり宣言をした弘前市のタクシー会社・北星交通の下山泰広次長は、乗務員が乗車前に、血圧や体重を測定し、オリジナルの体操を行っている取り組みを報告。今後の目標を「乗務中の心疾患・脳疾患予防」とし、栄養が偏りがちになる乗務員のために健康弁当を取り



健康リーターを育成し、活躍してもらう方策について話し合った県医学会シンポジウム

入れたたり、禁煙外来を利用して喫煙対策を進める方針を示した。

同学会は、本県の医療福祉保健への貢献を目的に今年から開設され、今回は約170人が参加。基調講演の前に行われた「一般医療講演では「糖尿治療」「大腸がん予防」「子どもの喫煙防止」など16のテーマで発表が行われた。

（菊谷賢）